

神泉苑と御霊会—禁苑の変質とその契機—

荒 木 敏 夫

はじめに

神泉苑は、平安京大内裏の南東にあった苑池であり、その旧跡が、現在も規模を小さくしているが残っており、往事を偲ぶことができる。

この神泉苑は、平安京の苑池としてよく知られ、研究の蓄積も進んでいるが、近年は古代の「禁苑」として検討されることが多くなっている。小稿も、神泉苑を「禁苑」として検討するが、太田静六氏による基礎的文献である「神泉苑の研究」^(註1)を参考にして、この稿では特に神泉苑の時期的な変遷と「禁苑」の性格の変質が、何を契機にして、どのように変わっていくのかに着目し、検討してみたい。

I

神泉苑の名の初見は、『日本紀略』延暦十九年（八〇〇）七月十九日条の次のような記事である。

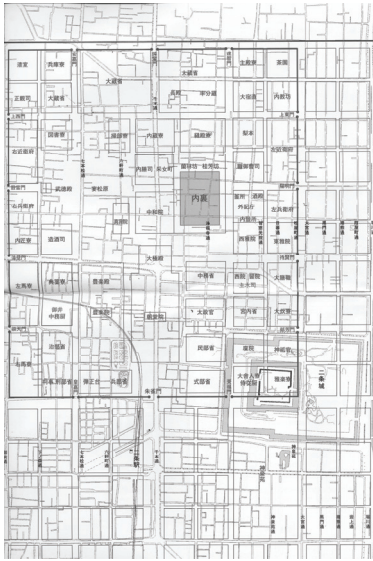
乙卯。幸神泉苑。

この記事は、『日本後紀』の逸文であり、桓武天皇が神泉苑に行幸したことを示す史料である。同趣の神泉苑への行幸を示す逸文史料が、『日本紀略』延暦十九年（八〇〇）八月己卯（十三日）条、『類聚国史』三二、遊獵や『日本紀略』延暦二十年（八〇一）九月丁卯（八日）条にもみえる。

また、『日本後紀』延暦廿三年（八〇四）八月壬子（十日）条に、
壬子。暴雨大風。中院西樓倒。打死牛。又墮壞神泉苑左右閣京中廬舍。諸国多蒙其害。

とみえ、神泉苑の中に「左右閣」を備えた建造物があったことがうかがえる。

これらの史料から、長岡宮・京から延暦十三年（七九四）に平安遷都してさほど年月をおかない時期に神泉苑ができていたことを推測できる。



神泉苑の規模は、南北四町、東西二町で八町を占める苑池であり、現在の東大宮大路西、壬生大路東、二条大路南、三条大路北に位置する。

この神泉苑の位置は、長岡京の宮の南に所在した南園との類似が着目されており、長岡京の都市プランと平安京の都市プランの関係を考える上で指標になる施設でもある^(註2)。

この関連は、さらに平城宮の南に存在した「南園」との関わる可能性もあり、王宮に近接する南に苑池を配する計画的都市プランの存在を想定する考えもある。

しかし、この想定は、平城京「南園」は、平城宮内の南の園の可能性もあり、遺構も確認できている東院庭園をさすとの考えも無視できないであろう。また、平城宮の北に所在し、発掘調査で一部の遺構が確認され、その範囲が東西 1 キロ、南北 1.2 キロ以上と考えられている松林苑は、長岡京・平安京には王宮の北方に該当する苑池を見出せていない。

これらのことから、研究の現状は、王宮の北や南に苑池を配する計画的都市プランを日本の都城の一貫して見出せるものとはいえない、とみるべきであろう。

勿論、そのことが、長岡京「南園」と平安宮の南に近接して位置する神泉苑との配置プランの近似性までも否定するものではないが、神泉苑の配置は、自然的・地形的条件が優先されて決定したものと考えるべきと思える。

このように述べるのは、神泉苑の位置が平安京の湧水地点の一つにあたっていることを重視すべきと考えるからである。

京都市内の水事情を考える上で、京都市内の地下水が、琵琶湖に匹敵する約 211 億トンあり、それは、地下に存在する盆地に例えられ、「京都水盆」とも呼ぶべきものであると提唱された楠見晴重氏の次のような指摘は、参考にされるべきものである^(註3)。

現在の京都御所辺りの表層地質には、砂れき層が広く分布しているので、当時は 1m も掘れば良質な地下水が簡単に得られたものと思われます。＜中略＞。特に平安京の水を守るために建立された下鴨神社、現在の京都御所、美しい庭園を有する二条城あるいは神泉苑は、浅い地層から良質な地下水が得られる同じ砂れき層の上に並んで建てられている。

この指摘と並んで、留意しておきたい事実は、京都市営地下鉄東西線建設に伴う発掘調査で、神泉苑に関わる重要な発見がなされている点である^(註4)。

すなわち、発掘調査によれば、この地から縄文時代の遺物が出土しており、加えて、この地が湧水地点で規模不定の池の存在が想定できることが明らかになった。現存する小規模化した神泉苑の苑池も、縄文時代以来の長い歴史を持つことが分かったことになる。



また、平安時代の神泉苑については、その東西の長さが判明し、平安時代の園池北縁部の水際には石敷きによる州浜、園池の北東から池へ流し込む流路（遣水）、クヌギの厚板を水平に固定した船着場の足場板や乾臨閣の屋根に葺かれていた緑釉瓦等々が検出されている。

以上、これまでの指摘や明らかにされた事実を踏まえると、神泉苑の地は、縄文時代以来の湧水地点であり、規模は時代による変化をみせていたであろうが、規模不定の池が存在していたのであり、平安遷都に伴い「禁苑」として成立した神泉苑はこうした自然的・地形的条件を活用することで誕生したと考えられるのである

II

神泉苑は、遷都してまもなく、桓武天皇がよく利用する臨幸の場であった。内裏空間とは異なる施設である禁苑であった神泉苑は、次のような史料によってどのように利用されていたかが分かる。その代表的なものを示しておこう。

- 1 『日本後紀』逸文（『類聚国史』七三一相撲 七三一七月七日）大同二年（八〇七）七月七日条。
壬辰。御神泉苑。觀相撲。令文人、賦七夕詩。後日、文人詩綿有差。
- 2 『日本後紀』逸文（『類聚国史』三一一天皇行幸下 七二一射礼 七四一九月九日）大同四年（八〇九）九月九日条。
壬子。幸神泉苑觀射。兼命文人賦詩。賜祿有差。
- 3 『日本後紀』逸文（『類聚国史』三一一天皇行幸下・『日本紀略』）天長元年（八二四）六月二三日条。
庚子。幸神泉苑、覽左右馬寮御馬。
- 4 『三代実録』元慶元年（八七七）六月二六日条。
廿六日乙未。屈傳灯大法師位教日於神泉苑。廿一僧。修金翅鳥王經法。祈雨也。
- 5 『日本後紀』逸文（『類聚国史』一九四一渤海・『日本紀略』）天長元年（八二四）四月二二日条。
辛丑。幸神泉苑。試令渤海狗、逐苑中鹿。中途而休。
- 6 『日本後紀』逸文（『類聚国史』三一一天皇行幸下・『日本紀略』）天長四年（八二七）四月二三日条。
癸丑。幸神泉苑、遊釣。
- 7 『続日本後紀』承和二年（八三五）十二月二二日条。
壬辰。天皇幸神泉苑。放隼拂水禽。
- 8 『文徳実録』斉衡三年（八五六）十二月二八日条。

丁酉。美作国献白鹿。詔放神泉苑。

9 『三代実録』卷二五貞観十六年（八七四）三月一日条。

庚午。麋鹿一入宮城内。於神祇官北門頭。有人捉得。以放神泉苑。

神泉苑は、内裏に近接する王権の苑池としての性格を基調とするが、単なる苑池にとどまらず、内裏外で行われる饗宴（遊宴）の場として、相撲・賦詩・観射・奏楽・御馬御覧・祈雨（史料1・2・3・4）、遊獵・遊釣（史料5・6・7）等が行われる場でもある。

また、それは、祥瑞としての白鹿（史料8）や詳細は不明ながら奇獣であろう「麋鹿（びろく）」（史料9）を苑池内に放ち飼いをしていることが分かるように、王権直轄の「自然動物園」でもある。

このような禁苑としての神泉苑の性格に変化が生じてくる。神泉苑の性格の変化については、一般的に、当初の桓武天皇の頃には、饗宴（遊宴）の場に利用されることが多く、平城・嵯峨両天皇の間を最盛期として、「九世紀後半になると専ら祈雨・請雨の修法の場として用いられるようになった」^{（註5）}と理解される場合が多い。

しかし、この理解は不正確である。神泉苑が、祈雨・請雨の修法の場となったことを知らせる正史の初見史料は、史料4であるが、その後、神泉苑での祈雨儀礼が頻繁に行われたわけではない^{（註6）}。この点を考えれば、「専ら」の語は不適切であろう。

本稿は、その点を前提にして、なお神泉苑の性格の変化として考えるべきは、禁苑としての神泉苑の閉鎖性と開放性の問題であると思える。

すなわち、神泉苑の性格の変化の契機のひとつになったと考えられるものに、禁苑としての神泉苑の京都の民への開放である。そのことを告げる史料が、次の史料である。

『三代実録』 貞観四年（八六二）九月十七日条。

十七日癸未。是月。京師人家井泉皆悉枯竭。所有水之處。人相借汲用。是日。勅開神泉苑西北門。聽諸人汲水。

史料は、京都の人々の家の井泉が涸れ、水不足に喘いでいることから、神泉苑の西北の門を開け、人々が水を汲むことを聴す、というものである。

王権直轄の禁苑は、天皇－王権の独占的利用に供される施設であり、一般民衆に対してはその封鎖性が特徴的であり、天皇－王権によって許されたもののみしか入苑できない施設である。

ところが、京都市中の人家で水涸れに困っている状況に、清和天皇－王権は禁苑の門戸を開け、水を汲むことを許可しているのである。こうした対応になった点を看過すべきでない。

京戸の民の利が優先され、王権の独占的利用が制約される状況が、ここには生まれているのである。

Ⅲ

このことと無縁と考えられないのが、神泉苑御霊会である。神泉苑御霊会は、以下のように、『三代実録』貞観五年（八六三）五月二十日条に初見する祭礼行事である。

『三代実録』 貞観五年（八六三）五月二十日条。

廿日壬午。於神泉苑修御霊會。勅遣左近衛中將從四位下藤原朝臣基經。右近衛權中將從四位下兼行內藏頭藤原朝臣常行等。監會事。王公卿士赴集共觀。靈座六前設施几筵。盛陳花果。恭敬薰修。延律師慧達爲講師。演說金光明經一部。般若心經六卷。命雅樂寮伶人作樂。以帝近侍兒童及良家稚子爲舞人。大唐高麗更出而舞。雜伎散樂競盡其能。此日宣旨。開苑四門。聽都邑人出入縱觀。所謂御霊者。崇道天皇。伊豫親王。藤原夫人。及觀察使。橘逸勢。文室宮田麻呂等是也。並坐事被誅。冤魂成口。近代以來。疫病繁發。死亡甚衆。天下以爲。此災。御霊之所生也。始自京畿。爰及外国。每至夏天秋節。修御霊會。往々不斷。或礼佛說經。或歌且舞。令童貫之子口粧馳射。膂力之士袒裼相撲。騎射呈藝。走馬爭勝。倡優口戲。遞相誇競。聚而觀者莫不填咽。遐迩因循。漸成風俗。今茲春初咳逆成疫。百姓多斃。朝廷爲祈。至是乃修此會。以賽宿禱也。

御霊会とは、『平安時代史事典』によれば、「非業の死を遂げたり、不運な地位に墮とされて憤死した人の怨霊を鎮め、神として祀り、これをなだめる祭り。平安初期ごろから起こり、各地に広まった」もので、「御霊とは、崇道天皇（桓武天皇の弟早良親王）・伊予親王（桓武の皇子、平城天皇の弟）・藤原く吉子>夫人（桓武の妃、伊予親王母）・橘逸勢・文室宮田麻呂らで、これらはみな政変に連坐して誅された者で、怨魂が疫鬼となって疫病を流行させ、多くの死亡者を出したので、人々は仏を拝し、経を説き、歌舞・騎射・相撲・走馬・演劇等を行い、風俗となったという。貞観五年の御霊会は、これら民間の行事を踏まえて公的行事としたものである。のちになって、吉備聖霊（吉備真備）・藤太夫・火雷天神を加えて八神になり、八所御霊と呼ばれ、上御霊・下御霊神社に祀られた」ものである。

貞観五年五月の神泉苑における御霊会は、史料が「今茲春初咳逆成疫。百姓多斃」と記すように、この年の春正月からの「咳逆（がいぎやくーせきの出る病気）」が悪性の伝染病で猛威をふるい（＝疫と成る）、多数の人々が斃れたことを直接の因としている。

次の二つの史料が、正月に猛威をふるった「咳逆病」に関わる記事である。

『三代実録』貞觀五年（八六三）正月廿一日条

廿一日甲申。停内宴。以天下患咳逆病也。』於雅院修法。限以七日。

『三代実録』貞觀五年（八六三）正月廿七日条。

廿七日庚寅。於御在所及建禮門。朱雀門。修大祓事。以攘災疫也。』賑給京師飢病尤甚者。

自去年冬末。至于是月。京城及畿内畿外。多患咳逆。死者甚衆矣。

その上で、貞觀五年五月二十日条の史料で着目すべきは、この禁苑である神泉苑で行われた御霊会は、「此日宣旨。開苑四門。聽都邑人出入縱觀」とあるように、京戸の民に参加を聴している点である。

これは、「近代以來の疫病」災害が、非業の死を遂げた者の怨恨によって引き起こされているとする観念に王権－貴族等だけでなく、京戸の民も強くとらわれていることを示している。

その対応は、非業の死を遂げた者たちの怨恨を鎮めることにあり、その為の鎮めの祭礼・行事に相応しい場として神泉苑が選ばれている。

王権によって、内裏空間で厳かに鎮魂儀礼を執行することで対応する方途もあったはずである。しかし、清和天皇－王権・国家はその方途ではなく、神泉苑の門戸を開き、京戸の民も参加できる御霊会の途を選んだのである。その要因に、京戸－民衆の声・要望をみておく必要があり、清和天皇－王権・国家の一方的な決定とするのは無理な解釈であろう。

前年の市中の水涸れに際して、神泉苑の池水の利用を認めたように、京戸の民の「疫」への不安を鎮めるために、神泉苑を開放して京戸の参観可能な御霊会にしたのは、王権の独占的利用の場である閉鎖性の強い禁苑を一時的に「開放」させたものに他ならない。

結びにかえて

中国－東アジアの王権は、必備の施設として苑池を造成してきた。日本の王権も同様に七世紀の頃から意識的な苑池造成を実施してきた。このことを王権論の観点から、次ぎのように指摘したことがある。

それは、「(苑池造成のような)、非生産的な富の蕩尽こそ、王にしかできない行為であり、その規模の大きさが権力の強さを示す表象行為の極致とする考えにもとづくものである。苑池の造成は、それを実現するもので、王権が必備する基幹施設（インフラストラクチャー）の一つとなることが多い。それは、東アジアの王権に限られたものでなく、また、古代に限られたものでもないのである^(註7)。

苑池が造成され、禁苑化し、非生産的な富の蕩尽の限りを尽くしたが、一度、誕生した禁苑は、どのように変化するのか。それを、平安京で確かめるために神泉苑を取り上げ検討し、小稿では、禁苑であった神泉苑が、京都の旱に伴う水涸れや疫病の蔓延に伴う御霊会の執行で、一時的に開放されるようになったことをみてきた。

王権の独占的利用の場である禁苑（苑池）が、一時的にはあれ、京戸の民に開放されるようになったということは、禁苑の変化という点からもみて、見過ごすべきでない重要な変化なのである。

ひと度、京戸の民に開放された神泉苑は、炎旱が続き、水に事欠く事態が生じた場合、開放が日常化していく。

『日本紀略』天曆三年（九四九）七月四日条。

日来、炎旱尤甚、田園焦枯、紀伊郡百姓等、愁申神泉苑水、依例可被下給之由、自明日可下給之由、被奏定。

この史料は、山城国紀伊郡の水涸れを愁申する百姓等に、「例に依りて」、神泉苑の水を下し給わっていることの分かるものである。「例に依りて」とあるように、すでに天暦年間には、炎旱からくる水涸れには、神泉苑の水を利用するのは、「例」となって、聴されるようになっている。

そして、『玉葉』建久二年（一一九一）年五月十三日条が記す以下のような状況が生まれてくるのは、十分に考えられることであろう。

又神泉苑、死骸充滿、糞尿汚穢、不可勝計云々、仍慥明日明後日之内、可洒掃之由、仰別当能保卿。

ひとつの行き着いたところ、それはかつての禁苑であった神泉苑の地は、「死骸充滿、糞尿汚穢」に満ちた場に化している。もはやそれは、王権の独占的利用の場であり、王権の遊宴の地でもあった過去の姿を思い起こすのが難しくなっている姿である。

小稿は、こうした典型の生み出す契機が、貞観四年の旱天と貞観五年疫病等の災害による神泉苑の開放化にあるとみるものである。

禁苑としての神泉苑が、上記したような変化を遂げた時期は、その後も貞観六年（八六四）の富士山の噴火、貞観十一年（八六九）五月の東北地方の大地震・津波等を代表とする全国的大規模自然災害が頻発している。

こうした時期を含む古代王権一国家は、天安二年（八五八）にわずか九歳にして即位した幼帝清和天皇の時代であり、藤原良房が摂政となり摂関政治が本格的に準備される時期でもある。

小稿では、京戸一民衆の要望を無視することができずに対応を試みた点までを述べたが、それが古代王権一国家の変貌と関わるのか否かについては記すことができなかった。これらの点については、後日の検討に委ねることとした。

註

註1 太田静六『寝殿造りの研究』（吉川弘文館、一九八七年）。

註2 吉野秋二「神泉苑の誕生」（『史林』八八―六、二〇〇五年）は、近年における神泉苑に関するまとまった研究であり、長岡京の「南園」との関係を探ったものである。

註3 楠見晴重「京の水脈シリーズ第二回 京都水盆の地下水収支」（関西大学ホームページ「関西大学学長室」大学執行部リレーコラム、二〇〇九年）。

註4 いま、それを『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（京都市埋蔵文化財研究所、一九九四年）の指摘の中から神泉苑の地の縄文時代と平安時代に関わる指摘を摘記すると次のようになる。

窪地内の砂礫層からは縄文時代後期後半代と推定される土器片が出土した。この他流木とみられるアカガシ亜属を中心とする木材類や各種の木の実類や木の葉の他、有機質の腐植物が堆積していた。植生の時代相が、土器片からの推定年代と矛盾しないことから、自然遺物の堆積年代は縄文時代後期後半代と考えている。この発見によって神泉苑の園池は縄文時代には自然地形として成立しており、平安時代以前にも長い歴史を持つ池であることが明らかとなった。

神泉苑は、平安時代前期に整備され、造営された八町規模を持つ平安京唯一の禁苑である。今年度まで実施した調査によって神泉苑の東西の築地を検出し、平安時代の神泉苑の東西規模を考古資料によって明らかにすることができた。神泉苑敷地内と、大宮大路以東の邸宅地域とは、遺跡の様相も各時代を通じて大きく異なっており、神泉苑敷地内には園池が遺存していることが明らかとなった。第三トレンチで検出した平安時代の園池北縁部の水際には石敷きによる州浜がみられ、園池の北東から池へ流し込む流路（遣水）と河口部の西側（園池最北部ともみられる）に厚板を設置、舟着きの足場板として利用されたと考えられる。

註5 『平安時代史事典』角川書店、一九九四年。

註6 『日本紀略』弘仁十年（八一九）五月十七条にみえる「幸神泉苑。奉幣貴布禰社、祈雨」の記事は、『日本後紀』の逸文でもあるが、この記事をもって、神泉苑での祈雨儀礼の執行とみなす見解もある。しかし、この記事は、貴布禰社に奉幣し、祈雨を祈願した場が神泉苑であったことを意味するもので、神泉苑で祈雨儀礼がなされたわけではないと考えるべきであろう。また、弘法大師空海が、神泉苑で雨乞いの祈雨修法を行ったことを伝える話があるが、それらを史実とするにはなお証明を加えねばならない伝承と考えざるをえないと思える。したがって、神泉苑での祈雨儀礼が行われた確かな事実は、史料4の元慶元年（八七七）六月二六日であろう。

註7 荒木敏夫「古代の苑池と王権」（『東アジアの古代文化』一三七号、二〇〇九年）。